

# サポテンの花

やなせ たかし 文  
川上 和生 絵

① 赤い砂ばくの中にサポテンが一本生えていた。がっしりとして青く、全身とげだらけだった。何か一つの意志のように、そこに立っていた。

② 砂ばくをふき過ぎていく風がサポテンに聞いた。

③ どうしてこんな所に生えているんだい。ここに生えるのはむだなことだ。つらいだけで役に立たない。少し行けば緑の平野がある。そこには水もある。ゆっくりとねむりながらくらせる。」

④ サポテンは落ち着いた声で、ためらわずに答えた。

⑤ なるほど。そこはいい所らしい。しかし、ぼくはここがいい。ねむるようにくらすより、たたかいながら生きていきたい。それが生きるということだと、ぼくは思う。」

⑥ 風はふき過ぎていった。分かったような分からないような、あいまいな口笛をふいて砂ばくの向こうへ消えていった。

⑦ サポテンは相変わらず立っていた。炎熱の中。うず巻く砂じんの中。かわききった荒野の中。

⑧ ある日、一人の旅人が通りかかった。もう死ぬ直前だった。体中がひからびていた。旅人はこしにつるしていた剣をぬいた。氣力をふりしぼってサポテンに切りつけた。ざっくりと割れた傷口からおどろくほどの水が流れた。旅人はサポテンの水を飲んだ。そして、再び旅を続けた。

砂ばく

ためらわずに

巻く

割る

傷

\*氣力をふりしぼる

⑨ あのときの風がまたふいてきた。

⑩ ばかだな。君は何にもしないのに、切られてしまったじゃないか。」

⑪ サポテンはあえぎながら答えた。

⑫ ぼくがあるから、あの人が助かった。ぼくがここにいるということは、むだじゃなかった。たとえ、ぼくが死んでも、一つの命が生きているのだ。生きるということは助け合うことだと思おうよ。」

⑬ サポテンの傷口はやがて回復した。信じられないほどの氣力で立ち直った。砂ばくは全くかわいているように見える。でも、水はどこかにある。サポテンは、ほんのかすかな水を体のために、さりげなく立っている。見たところは砂まみれだが。

⑭ ある日、おどろくほど美しい花がさいた。だれ一人

として見る人もなかったのに。

